

### ヤンゴン素描 3. <sup>カラウエイ</sup>迦陵頻伽と <sup>ヒンダーミン</sup>鷺王

山形洋一



ミャンマービールのラベルでお馴染みの鳳凰のような形の船は、王の御座船で、カラウエイ・パウンと呼ばれている。ヤンゴン市内のカンドー湖には同じ形をした Karaweit Palace という名のレストランがある（図参照）。

『緬漢詞典』でカラウエイを引くと、「パーリー語經典に出てくる鳥の一種で、迦羅頻伽鳥、別名妙声鳥」とある。インド人の空想が生んだ鳥の一種で、サンスクリットで kalavinka。ヒマラヤ山や極楽浄土に棲むとされ、日本では「<sup>かりようびんが</sup>迦陵頻伽」の名で親しまれ、舞楽「迦陵頻」では童子が鳥の翼をつけて可憐に舞うそうだ。

迦陵頻伽とよく似た鳥の像が、ヤンゴン市循環線チーミンダイン駅のすぐ南西、寺院建築用の飾りを作る金工の店の前に、仏塔の上にかぶせる大型の傘蓋（ティー、Htee）と並んで燦然と輝いている。

「これはカラウエイだよね」

私は工房を覗きこんで、知ったかぶりをしてみせた。返ってきた答えは、

「いえいえ、カラウエイではありません。ヒンダーです」

なるほどサンスクリットのハンサ Hamsa が訛って、ヒンダー Hindha となったのか<sup>1</sup>。

ハンサは、天地世界創造の神ブラフマー（梵天）をのせて天上を駆け、水中にも潜る聖なる鳥で、『岩波仏教辞典』によれば、1. 首が長く、2. 全身が白く、3. くちばしと脚が赤いとある。インドや日本の図像ではガチョウの姿をしているが、ミャンマーのヒンダーはオシドリのような体形だ。一般に、ツクシガモ属の渡り鳥、学名 *Tadorna ferruginea* (*Casarca ferruginea*)、英名 Brahminy Duck もしくは Ruddy shelduck、とされている。首はあまり長くない。

ベンガル湾を隔ててミャンマーの対岸にあたる東インドのオリッサでは、このツクシガモを「パンダハンサ」と呼んでいる。モン族がもたらしたインド文化セットの中に、オリッ

<sup>1</sup> 正確には「ヒンザー」と「ヒンダー」の間の音。英語の Father の [th] に近い。